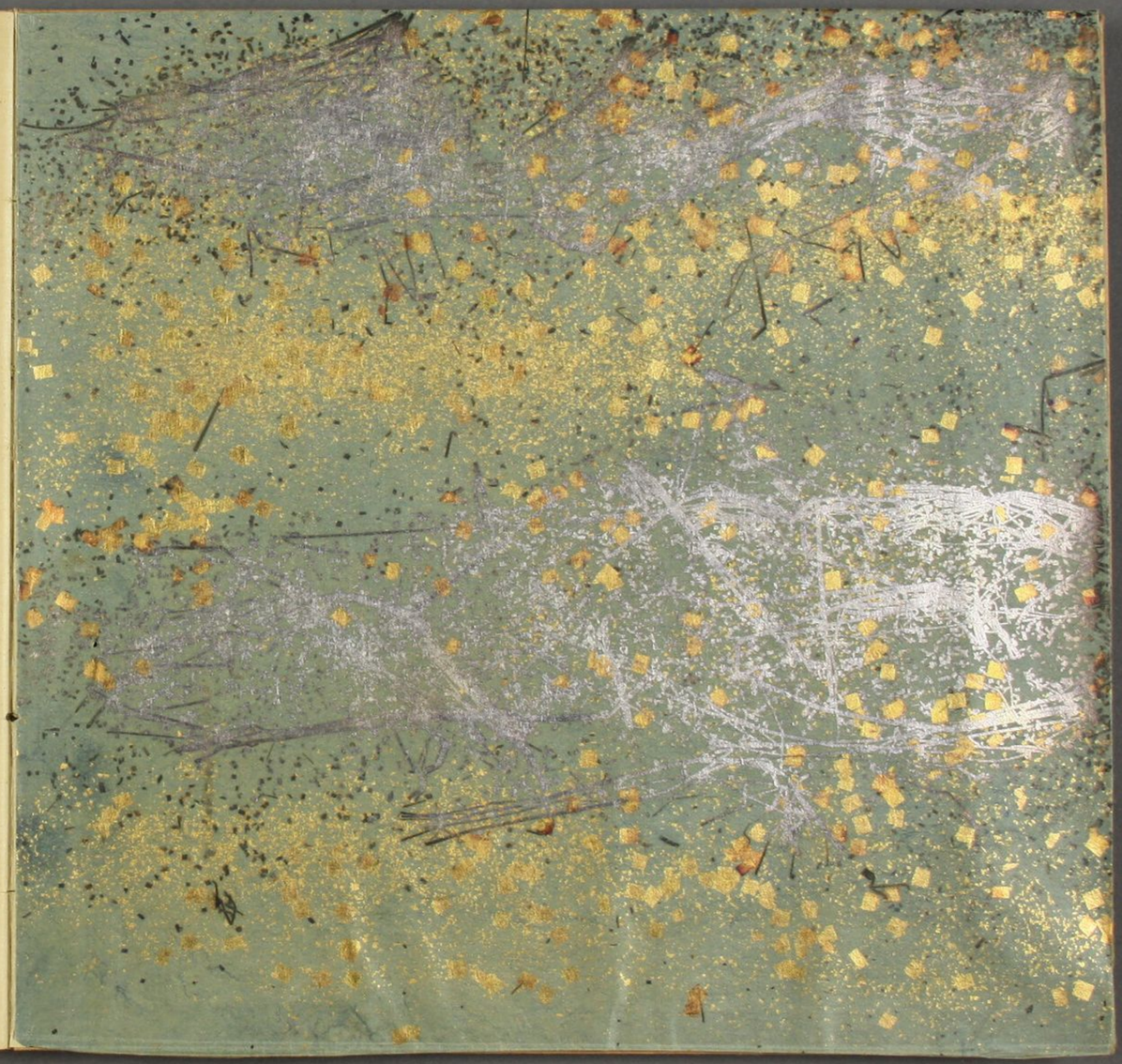
後撰和歌集 下



帝國文庫

戀哥三

三条右大臣

みるもとの

かすみおもこめ

人よさくらの

恋しとやもる

とをちへに

逢

さくらゐもみぢ

うるうさとも

三条右大臣

みるからに

しるく

うつろふものは

ねをなくよの

言つてもの

侍るよ

たむけもぬさも

人ぞをしき

かわそめもの

そわよくる

ひむ米ば

あふえちよ

ところ秋の

えもわくる

三条右大臣

みるからに

しるく

うつろふものは

ねをなくよの

言つてもの

侍るよ

たむけもぬさも

人ぞをしき

かわそめもの

そわよくる

ひむ米ば

あふえちよ

ところ秋の

えもわくる

三条右大臣

みるからに

しるく

うつろふものは

ねをなくよの

言つてもの

侍るよ

たむけもぬさも

人ぞをしき

かわそめもの

そわよくる

ひむ米ば

あふえちよ

ところ秋の

えもわくる

三条右大臣

みるからに

しるく

うつろふものは

ねをなくよの

言つてもの

侍るよ

たむけもぬさも

人ぞをしき

かわそめもの

そわよくる

ひむ米ば

あふえちよ

ところ秋の

えもわくる

君のへて待ま
はまほしけれ乃おおくも侍る哉
いくすぢよ人ふも
思ふんとまれめし人いそぐを
とも称めあやぬまん
須佐乃男のせるすもるくさぬ
へーといなりくれい
中務

いくよふるとも志ぬとみよ
逢ふ日をうへんとすまさ
返し
須佐乃男

志ぬくと某くくつもあひ
旬をいつ乃春よりみそよん
時くくるる方乃ぬる須乃き
うの雪乃つをうきつけ
てけれいかさらをつを
侍けり
本院侍従

縁よりもるもの人ぬるふ
おもひをつよとよへ
大弁言國朝臣乃家乃侍ける
めよ卒宝ひ
ひけてりまて
はれよいう暁大夫をよむへ
被てわすれ侍よのくれいふこころ

八乃許よはらいしくる

まよ

超めとも回よへ

ねぬよ兄しのら

お将志通ひ仕

てことめよつまて

乃住よ出くもて

やとみめ

宮士てぬ宮もぬつる

こまも乃山をし

ひきよろよ

ひきふ乃むま

うーよわ男社

くるよ

も仮とをおると

乃くるよきふ乃花

内よまへわてひしーう吉せき

をくる男よ

百数いをみくえくす山ふし

八よし人、張吉つしもをぬや

めもとよ衣を

よつるとて伊

もて山いを乃延ち乃すて衣

志ほまれいわと人やこるん

形きても男つ

ふうて家人よも

おうぬいやは

のもとよりもてまいりける状
をひきおけるにいとくるしきに
久しくまかりゐてえ乃あらぬよ
つらづえ　藤原守忠
あふさかの関の清水に袖ぬれて
すこしもあらじと思ふ人ゆゑ
なにしおはゞ逢坂山のさねかづら
ぬやうよ乃人にしられでくるよしも
いつ方よりもちくれて乃よそうち
おもひくはゞ人傳成り
男乃ゝいやうにくれてもあ
りくれて乃
ちとせ

はゝ業をもうきをもよろこびも
歎乃よりもちくもあこうみそれ
めよんをそ
しくれあるよ
こめまくれ
いつて待をれ
まち濱よ成そてよあすか川
わくわ乃そこそまるへくれ
影ゝす
ゐそそそ
なもる川を
返し
あすはのやまよ

あまなう子源乃いとうひぬれ
ちるふなこつも袖(袂)ぬ〻くも
影しう子 江源こと
深しうも
美濃ことちる葉物なくり
ほととと人よ逢と凡つむ
いもう仕くるめつまなきよ
おもひのみよ
こてかく時乃
返し
時乃まれうつく
ちるもきこ夏よまもとまわくり
こいまもちくろめ

むは降ふまお入江をおく毎乃
うきうこと立も家にする我
紀内親王
はの國乃ちよ
もくきく夫乃ふこうれ
人乃もとまかわていれきり
くれすのこよみてうふて
いか入仕くと人石も
よこ人石も
受ちもあう人乃あませ
はきめよ露ちくもまり
返し
源ふ仕くもめもある物を
ちふそわ濃やはあり

今はとてりつへわぬる静あるに
おひ風よ
男乃をとこもすさきやうくつをよ
乃とくれい
いうきうきうき小町
ひとりも波よぬまぬりそめて
男乃心つくく思ふなよ
おをもわよおとう舟もをぬとい
ひつうきうきわくれい

こゝまんとおもふ乃やうく、
雑両人をうこまーやそ
よひよめよあひてもあります

淡人志つ乃

藤原滋幹

ちもやふる神ひなうけてもちひ
さとも超こしくいつふゆめ
院乃やまとて
おもひよい恋つゝもいれ
あやふくすてやすくまき
よみもの乃ひとなわて
ふこてひてもいれ

元平のみこ乃
波乃ふもこぬる松の

あひそもつ
人乃よの乃
物いの待く
いてゝもん
よといひ待く

小田乃苗代
心乃いを
くゝかへよ
てまわて
夕去へんと
はもそ
物いのくゝ

てつゝすとそ
こゝろを乃と
吾我なく
人乃もと
をしく

あひ乃そ
名ゆ

源まさ朝臣

人もすもめぬ
出乃あしすゝを
よわつへかまて

坂上是則

恋ふる四

芳もとよはるくる

わく恋ゐ寸ゑ

ゑ恋ふかりあるこゑ乃こと

ゑふくかりをおもひいてつゝ

ゑふよのくるゝをまつ

ーゐそる

よるゑ人ゝゝ

うも迄ーゐくそはきあて

やまとなてこゝやゝそれる

ゆよはるもーくる

山寉乃峠よ

枇杷左大臣

よふてゝも年へぬ

わ物思ひを志つゝぬ人きを

ゑよわあさ人我おもひけて

きーくる

むゐそる寉ゐゝゑ

そこのもとちいる心ふ

返すもゐ待もそれゝ

きよてつゝくる

兄るもなくめもあき海の砂ゐ

つゝゑくもうこはるふ

あま兄ゝ待る男よ

読人ふも

こわ次庭乃海乃志ゝ法ち平て

兄る袖もあくうへるゝわう

あひおもわで住ける人の
乃ちへまかりけるをのそ
冥こてこのそつ乃松みあそ時も
清あよ乃へ新をころ
返し
近くれはのいまこるー
冥乃ほつそとおもひこしかん
つく成のくまみもとよいま
とそもこうそくちと返つこ
すとて　平ふきこむすめ
今いとそこするつよかまま宇蛙の
うをゐんむやいおもいきわーを
返し　源恒柱

ろうま多秋宇蛙乃かこうも
うへもいはまきんなりくわ
物いひくみ乃ことをうてへ
もとて　よ
新こよ乃くもやもろといのつ
ひふく恋をますかこ乃
おとこ乃物ふといひつらくる
み乃あふみおかわてて
きこくもきこつをすやそくん
かともおけす成よくれ泊の床
とわよへる乃なきくる我
てあしろ山田乃そかつ村億て
ひとりへる乃吉をそのめる

大伴

旅川いまるをよわかつりをむ
乃ちまつ乃んをもあやーわを
大浦もとよつくる

敦忠朝臣

ひむろ乃ふ乃ふ
こふへはる

生屋葉平朝臣

浪のまくらも
返し

いをいを
おほうみの
波さま
つれなくみえ

よこひとり
ま
人
う

おひく方ゝ物をなら行の
よゝへぬものとおもひもそろふ
せ乃いそわぬつゝをまて里てくる
ねよなけそ人わつゝまわ旦行乃
世ゝへぬをいつかもちぬと思そん
ゝゝくゝくる女乃いをへまかわを
いを乃奈ちよ乃ろゝかゝをよ
恋てもおくるゝひゝき
一条うもとゝまりくれいねよ乃
といひよやりてわくれいねよ乃
ゝをまてやるとて
恋てくいつけ
一条
ゝけてをいる乃てふくそやよ

那うちとけて志乃ふゝわ
うへし
那乃れいいと心うまとそる
ちかゝぬ水乃うときやゝわ
人乃むすろよみ思て国行くるまつを
よ乃くはれいやそこわゝくるう
へりすよ
人をおうきて人志てゝ
苦ふゝ乃わるすあわを
こまれうめよのおいそそまわ
わゝれと指いさるふくれ里つ
ぶゝる
郎そなつむそろかひまて
こうをよろうゝもまてわろ
人乃許よ初てもろてとゝろゝ

すいてきて
つそ
侘ぬれも今
ま秋はく
みてこそ
いふときく
いーはれい
いまてかく
人はてあ
ゐ彩彩長
くるまわて
といかれそ

額恵領長

もろともにいさとんすまての山
このとをせ物なくよ
手枕へてく
待れひ
をけ

清澄領長

かくきわふきもねを
杉天前社
人乃もとよ
すれのもや
よわのこ返
てきへいゆぬといひもこう
かれも
いそや人乃もこ森の
おくもも神のこひつ

人乃もとそのまかわりくるをみそて
のこうへし待くれを道ようわい夢
よる主ほ乃こもちくる海もおもく
逢るまこよう〳〵とおもへ
人を思ひはけていしやうわ待くる
を待ち紗よ乃こ待くるまこそ
かもなぬ山乃そよ乃とも
おほく度回を逢一つる
ひをしくいりやうわ待くる新雨
のこ待くれいあしひ乃舟長
たのそてあそて年みるいつそわよ
こわぬ心武人を〳〵あそ
逢一いを
夜半乃主まるくまよ回りをい

こわぬるも〳〵と波乃九もそん
逢一をあくよもくる人主〳〵す
うち住てよそこむ海よそこむ海の
こそへぬ山をあ〳〵と回よ
かへし
山ひこ乃海乃ことやをい宮蛭の
むまま〳〵よりやうそん
むまおまいひそ寸波よ三年洋よ成待
くれも
あ〳〵むみ年乃ことやをい宮蛭の
むまおまはをやめて答そん
いう〳〵す
ふま出る波乃ほみりすま
つねよあふこ乃海とこのむ

恋歌六

人のもとにつかはしける

逢ふをよとおもひわたるもいつしかと思ひ

返し

人しれぬおもひのみこそ苦しけれ

うきもすきもよそにきかまし

返し

おくるるよ物思ふ人の

世のつねと思ひなすにぞ

うきもすきもとこそ

もすそぬれぬる

返し

水もらさじと思ふ人を

そでひぢてあかしつるかな

ひとりのみ

返し

いとど思ひやふかまさる

ひとりのみ

返し

逢ふことをわびつつ

ひとりのみ

ぬしの乃(の)をよろこび(みろ)ゐ人(ゐ)
おもひよそへ(ゆる)ものふりくわ
返(へ)し
よこ人ふも
さつきまつ(も)ほとゝぎす(も)
かことそうわすれ(ぬ)ものよ
いひそへてとめ(ゐ)ける(る)あやめ(ん)
をりすときゝてをのいもをしる
いひそへて(波)ばう方(イミナシ)よりおもひよる(も)
おふしたてゝ(ゐ)よ(る)人乃思ふ
仍(よ)りてといもをみてくらす(ふ)
つおりよろこ(ん)あくわよう
きておとろ(ろ)く

さつき祈(ゐ)ふ(ふ)ね(ぬ)ん(も)て
天(あ)をおそひ乃(の)中よもゆと(ハ)
ん(も)そ(ろ)をい(ゐ)表とおもへと人(ゐ)
よろんてゐ(む)もいひて仍(よ)れ(ハ)
ま(ゐ)てのこ(ろ)ふ(ろ)ふ(ろ)
人(ゐ)よかく(ろ)ふ(ろ)を
いく(ろ)もあ(ろ)ん
夜衣(ろ)よ(ハ)
うすき(ろ)ん(も)
いろ(ろ)てお(ろ)
なけ(ゐ)ん乃(の)
思(ゐ)つ(ろ)
あれぬ(ろ)も

杉山よ渡さ　藤原守文
家よわこ　ふる吉つきこゆふ
男乃許人　いあつを
やそよ司る来うも
やそよひ　ことわれ
よくら人
返
もるみこ　おもこゆれいこうを
志るくいう　もそて川へき　山
ゆうもとよ　わいとくふ
徒るとい　のめをこをて待れ

あくもむる　うのくよくなす
今もをぬ　へきこうあき家乃をの
もとよのう　まの乃こうよすき待
くるとこん　とうそこも成
をれも

人志れすま　つよねまぬみくる乃
月よもこへ　こうあきむれ遠
思りてすこ　待くる人のもとよわ
うるをしま　む人よ凡するといす
くれい

龍田川　ふ君乃名をおこ
いそを懐　杜乃いそとふ
守る院よ　待くる人よそこ
つらくる　返のも待もわ

うこの野てい
よき多指
うへ
凡こなの山
ほうそきも
つまあく
こひ侍てき
世乃こめ
いちよわ
をつく
彩凡しいお

よくへ八士てに
よき多指山ようのこう
うへ
凡こなの山あくともよわ
ほうそきも時もぬ
つまあく待くるへよ
こひ侍てきぬてふすぎまを
世乃こめも成ぬへなふ
いちよわくるよけて入ようれ
をつくくる
ようこひもち
彩凡しいおくへ入くる夫ようわ

あとう波乃とへそいはむ
あひよくるよ乃又あいそわくれ
きてきわし時これあ扱を
あと今宇こ都まとよん
世乃もとくそ
いよ

あすてお枕乃上よあう
爰ちをこもこてふ
たとこ波と寸成るまて
をともを寸成もりふす山
返一

よくへ八次
ふ乃こくたて

新ゐ一

仁和乃こ
よそをわ
日

そう乃山ま
春みよ
おもひ
乃たも
てよ乃
おき
しくり
行幸
なとゝめ
わ
行幸の
乃ふ
我仕の
春ゝ

てまつり
ま乃友
乃ま乃
くゝりわ
乃ま
とや
今まてよ
よゝとせ
返一
友列
もゝこゝ
外まよ
殿上おわ
別下みも

[illegible]ふ人をくもきまわりも
すくなやしと人乃わひくれ
伊勢乃海乃はわみうけもるさま
ふまんをうこまつめり
おほおおいまもち月のさ川
乃をうしよこともをはて
中務
[illegible]川乃瀧乃いと乃まかくれ
こそわよ人をよもすもや
返し
白浪乃たなひくこと乱しつ
よるをそ人いまつといふなるり
さもすをいをとわて

道ふ乃人ふむ
よにをこそいのそ人小田ふまき
ふ坂乃実ちゝ中よおひつ
すさ待そ房宝をつくりて
よる乃りそ人を見て
蜉丸
見やこ乃りもうへるもゝ乃つて
さるもゝぬもあゝさの実
待そこゆる男もなくて物ふの
小野小町
袈乃すもうこと母のもをあこ
よゝうこわそ彩そまま
あひさわそ待そめんもも
めさふそ待それたと人乃

とひらかれ
候事ともいそ
教うもうけ
法をもとめ
山ふもとあひ
て此寺院よ
ゐ年といよ
へわおそ
ことおも
つかえよ

七条乃おとゝ

ことの葉ふよ
そうおほ
此辺
海と乃こま

そふふうつ
志賀乃うら
久乃人乃志
久わおほ
てかのこる
山れ久わを
ぬしよ
きつゝて

はゝそよへう
神ほむ
日みれも

ひるお秋や
久ふとや

ぬ彩乃見ゆれ
きまよそへ
もつへよみる
もの里をそこ
よ心をつけ
車よわろ
つけるそのそ
のこよう
送仕久
くろめ

を思ひも
をかはく
ろわくを
見て
みてよ
ふそまうへつ
ふ彩を
ん呼りとやいそん

きこを元長乃みこよ送りて

中務

あけてこそ ほのぼのえこうの
浦一面に みこを思ひやりて

こて房能長つのこまて新羽
こうもりは 扇風てこして
かの団乃名あるに 恋よわこを
てきひにと おふけよ
いこみよ

年をへてこ こわこまをぬこひて
むもかへわて しこうすきへき
冠将能長宰お申将よわ中
弥ちよまわてみの手のりゆこ乃

うへわいちの あるまかわてれ
れ四うをのみるついてよ

冠将能長

あこ乃こうを 山いきをみまと
詩もむ ようとうぬふ
あそもち乃まつりおと人乃住を
てこ乃かりまうてきての時冠
将能下能あこ乃おまて

みつる

引うへ人いむへこう老よられ
れ乃こうくなわよあろふ
人乃むすめ 添うひきみまを待
をめのそ 付けていうこい
しくれい丑つ方まてうひ

小山田乃おとゝ

いとゝしく春たつ霞かすみこめて

三笠山さゝ分まかりてあくる年

のまた長めしあわときゝて弁当

みこよりつかはす

むすめの答

いそかくと年きわもせぬ程もふ

荒しうる門とてのこゝろもむときも

うみ出たのおほいまもちきよ

あひよくわとまて一うら

弁当うみて

春ごとよりてのこゝろもむときも

をすとりつゝ

庭の梅長女

うぐひすよ

思ひきや君ゝ夜をぬなつへて

こまもちなうゝをまん

返し

庭の梅下

いつまへも越てくわふ折うま

ともいもぬへき天乃ゝ衣

まさゝてっとの井おをとわこえ

て大堰ゝをとよもてきこわを

まこそ
あるの末つみ去てのそめわ
なれよ久わともに見ねる衣う
返し　　非二
よわぬとそ思ひなもすそ宿衣
よそへてあわびうこもすま
幸みんのよふいぬるとにれ
そりきいのもきまそ
かうすあるまとへ人乃ア
ふれて乃幸をもたのさすみの
あそよ法めぬるうきまとおへを
若君さよきう旅人よわかふ

大江千里

むそむ乃こよひいうわうあけ衣
ふるさとにてあすハをよろこめ

七条后

人ひすまをはも
あそ乃もと
法返し
あまま方に演乃中まこゆれや
ふそーとみ成ぬん
京極のみやもにあとふわて

戒うゑんとそして仁和ちよわてゐ
ゐれを

むくけてこと世あそぬ天っ永を
おけるっやいなっんと思ひ
返し　小野ぬ古朝臣
なをあっ子ふっ9いむくを
ヲみいこっ9ふなれおわりり

後撰和哥集巻第十六

新ら二
おもふ心あり前大政大臣よら
をて付ら女原業平朝臣
いのち於ぬうき世をいのをん
ひっけよおもふ事をいうをん
やまひ付てあめ雨をまてら
ふこころわて付ろよまへのそよわ
男院のこいし山よまってろをし
今あんりすまぬる人のはをて
まいをひてつろ
と松まの朝臣
事牧乃ゆふっけよまくらの子を

きていやうめすまし（イこけし）さう
前平宣旨宣旨勝太政大臣の家
よりさかわいて、あるよかの家よこ
とまれてりくしとうまん
行くる
宣旨
こ山よりひきゆるひくくみ
詩を恵こ分もをぬ
返し勝太政大臣
ひくくの詩をこりこけめへく
凡山とをわりよもやもきまう
かそくよいてそへ行くるよ
おほいまうもきこもむあひて行
くれを
あつくの細長母
ちっれかもみほ多よ弱とめて
きそくのへ彩をいるの凡む
人乃うをかりて行くるまつよを
まいひつうく
わつみわ事院のみて
第氏ふよかくをうとやさよ
延長乃れ時安義時みお乃れ
まへてもそくつきとりて
三条大臣
かくて乃こやむへき知うるの振
うもやーろ乃第代をうん
おまれ時きこの行幸よ
ここてをうて

凡こをいくそ
久の浪沸春
戒仙つまき
久るよこと法
百のよわこめ

ほまをう雨と
おはる濱も
これれあひ
してとめそ

思ひよい法る

よこ人〳〵
もくむ山の
ふすま

芳原眞風

けさこも
わる付く
うてくを
所をわく

よこ人志る風

志つめる彩
字治のあ
くれまわて

うちはの法
家も現代
院のこと
人くよあ

おてはよま
る時志賀よつ
年老ていまり
ろよ志る人の
大江眞後

兄あれ男ま
ぬへきれ
間よおそまい時
あをそをせ

奉るとて　小式のめのと

いつるよ（ね）どこ
そつ牧風い
返し　大将つ
心してまもる
山おろし
おところ
いひ
そなくて
月
くまの
よこは

亭

つもるとようのみこ

やまこおしやまひと人よろぬへ

なくくもれるへもまきり

延長時れむさをつくてや

くまいうへおよたほをつ

いわくまいすおそもまいわて

おほせ事うけこはられる人な

つくりくそもいま

そも月みこよわをそくもれ

いとくそ山ここしはる

やまひてんかそ大将よ

世くくるそ藤原敦敏

第代と契しるいくて

人やうへおもなわぬへきふる

返し 大将

うけていへもゆしき物を第代と

契一こそやかおそさうまる

おれのみるそ神よううもそきこ

くをうこそ乃なとわそて

哥と見て神よううくれとうぬ

あるはのわこ波乃もまそうみこ

よそみひてくつをうしあひて

くわもけむやの彩長くくへて

くつ我一てくをつへすとそて

おもいそそくこ波さをこてうはて

いくこまこのむよーを吋の人
ふとよおて　高ほ門親を
あをき木よまうこれる枝もえ
けをふきおすいふりきい
御つよくてまつ張くる
涙滅石
うつろぬんのよくあわくれ
こくおもくるよのつることを
これこせのもとまかわて
おいひおとくれる
きむの風やとりくれる
よくれのあこめよわ風の
さきくいうへていれも思うを
男おいひくるをきいれ
きうへわてあくまをくる
きく波のオきこれてちい
手をうーほよ
返ー
とわをあ寸ちさいれあく波
あやあくはう神のぬれくん
さくく寸
いてちもたのうさまをよ
衣のをきもあといふわ
ともくそちのひきくあそきり
くるまかりあひてよこ約

あをぬつるよ立つき道もさわりを
なとう秋まよまとよんう
影さへもち
いまわりぬいとのこんえ
さてもとけすれゆふ
八乃やま通ふ乃付しかて
ゑふくともく人よもまて幸は
さてまぬ山よまるも
返し
よのゆまさへ山よまるも
うものかやいそておもむ
山の井乃きよつりふる
をとみおこと

よ乃人ふも
いをくこ乃ておやまも
やまもくふ
これりとき
さて浪山ことくもこんん
う美世中よはうわふむ
いいかもぬをてをてよの
こもおを思いわぬる
返し
美登山こてむうそかくめ
こむおけ美乃救さわふん

陽成院のみこと申しける時
みつせ川ふかくもあらぬをひさしめ
ふわたれいかでまつわたるらん

武蔵

かちなぬぬまのあやめをくちなしの
光乃くしもまかわ通ふくるめ乃いとけすの
こゝろ乃ほどもとゝ日もへぬ
おもひをかさねてくるすとひつ
うつゝともわれ

業平朝臣

難波なる汀乃芦乃実うよは
うゝこゝてそ人乃こゝろをみるへかる
世乃もとよわう

遍昭

ふるとい松もそたゝまほしたつ乃
とゝへる山乃松をもみ松を
ちおもひ出ふよつきそめくるめ
の雪よつきそめくるめ
くるを待つけてんあわくる人もあれ
いひ侘てんあわくる
妻を乃人めまれなる山ま
家ゐもとゝへ

業平朝臣

ふ我うと人まぬよをいま
こゝみいまし山まやあぬ
世おもひ侘ぬて年乃山ま
こもを待くるめをむすひあり

かくるや人我たもとなるさん
影しるす　いを
ふく風乃さそふ
さそもいこもちやもちやきこもきふ
春のよまくら
川のほとりに
車乃あひて
あきふるよりそつよ凡いれ
そあひさわりて
方こ回そ
行てひさ
あわさつよ
車よいひ

果院大夫

ありて乃そかみほのくまれ
うくてあり
枇杷大夫
もとめ
行くる家よ

後つ

わかやとをいつなくそもをみ神のまくらを
あくわりよおこす
返し　枇杷大夫
なくの氏ふよそもをみ神のまくらを
おわしてそおこすふ
あまくひよふわりよくれそもうひて

新古今

いそのかみふるのなかみちふりにきとものなかりせばいかにまたまし

むとしとしまちしよりはつ花のいろもかををもわれはしりきや

と人のつかはしたりける返し　遍昭

いにしへのしづのをだまきくりかへしむかしをいまになすよしもがな

文の上に書きつけてやりける

こけのころもをかりにきたりければ

返し　遍昭

よのなかをいとふまでこそかたからめかりのやどをばをしむべきかな

つれづれとこもりをりけるころ、ひとのもとよりいかがときこえたりければ

返し　遍昭

ふるさとはよしのの山しちかければ花のころにぞ人はまたまし

時をとりてやまへにまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

あかなくにまだきも月のかくるるかやまの端にいれずもあらなん

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

せうの乃きよ

逢坂のせきしきわたぬる歟まそ

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

世の乃ぬ物ゆへ人をおもふかな

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

あかなくにまだきも月のかくるるかやまの端にいれずもあらなん

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

せうの乃きよ

逢坂のせきしきわたぬる歟まそ

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

世の乃ぬ物ゆへ人をおもふかな

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

あかなくにまだきも月のかくるるかやまの端にいれずもあらなん

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

せうの乃きよ

逢坂のせきしきわたぬる歟まそ

ものへまかりけるに、ともだちのもとにつかはしける

遍昭

世の乃ぬ物ゆへ人をおもふかな

おほいまうちきこのあとうをともも
とぬとうとうみ侍らんたち

大納

家方もこゝちぬつゝ悲つゝき、
心もことよなわやしの久ん
人のむすめよ侍て
妻木をきつゝもちぬる物よ凡人
よとゝ言ふきゝもはの國の
なまおきさきするなわり
よとゝ言ふきゝもはの國の
後ろおこゝまるまわて乃
前坊おもしこゝろる節
こゝろる節

大納

うゝれもかなるきものをひろひ
家をや人ゝ懐回すつゝせ
迫しゝ
よゝひゝゝす
おゝおもうきもゝわうひなふを
詞をわくとおもひもつゝき
大納ゝをゝしのあつゝの彩乃
ものへつゝりゝるまゝをもをゝう
へゝわれはゝりゝる

大納

道ゝぬもなゝまくよ虫の
山みゝはとゝ人もゝりゝり
かへゝ

敦忠朝臣

百人一首

二条院讃岐

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らねかわく間もなし

源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
くだけて物を思ふころかな

大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火の夜は燃え
昼は消えつつ物をこそ思へ

藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかな

藤原実方朝臣

かくとだにえやは伊吹のさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを

藤原道信朝臣

明けぬれば暮るるものとは知りながら
なほうらめしき朝ぼらけかな

右近

忘らるる身をば思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな

藤原高光

一条摂政御集

藤原伊尹

三条右大臣

藤原三舟

三条右大臣

藤原道綱母

藤原道綱母

藤原道綱母

秋くる時

きてとへど乃きやとく事の小松ぞ
枝志をいくしやいく乃ひろわぬ
ものもあるしぬすをいつ比男乃
あまるよの中つけしおも

ものそ

ものそとむくてぬ物こ侘しさ
人乃こゝろ乃あくかるへくわり
あるへき人乃心も見るへきを
露乃為
人乃もとよわひもそうんもち
らひてはとくくあんそう
といひて侘うれて

もゆともよいふそとてその山
いそうひとわこむといをそ
月夜よそれれて

かんつをのうひお

をしまへて山乃端なくい月もかくれし

雑二四

かそうをよめる　人丸

あをやぎのいとよりかくるうぐひすの
ぬきみだれたるはるのあさかぜ

題しらず　よみ人しらず

ゆきふれば山もとどろにうぐひすの
こゑもこほれ

離別　羇旅

みもみくらへまかりくる人を
送りもせんとてつかはしける
　　よみ人しらず

おわくようもて梅の花のあり
ける枝を折りてこの人のもと
へまかりて侍りけるに人乃家の
ふさをさしてつかはしける
　　よみ人しらず

よの凡人ともも
よめるたむけにおれる桜花
ちりまがひてこそ故郷もなつかし

おもひやる心をわりなくもとめて
行くる道にしもかかりくる人を餞
とて
　　橘直幹

きをくとも
もとまくもよもあらし寸境
そこなる記をたくへてそや
志ふ乃へまかりくる人をまち
てもとめつるもとより
　　するが

志ふのなる清乃山も越ぬれ

善祐法師の住吉乃くさ
まくらはいも
なでしこの乃とさとおもひ乃
うまかひするも世乃ともも
影しすよこ人もつ
そむれぬ松乃子乃なとよも
とをもくとこれそし
返し
をもひやるこふ深乃そまも
いつまるこよ乃こそり読
享る院の内つおわめ乃ふる
とり乃秋弘前殿のへまき
をう

なるれとおひもおまぬ百数を
凡そこんこ9ほうおるま
法つ法読ふ
ふひとつまぬりるまをにあへ
りめくわてもおとこをこ凡
みもののくまへまかわくる人よあ
あおてこうもよう
をけるこ
よみひとこす
なり道ふ井よ成ゆをう
とまるこう法もこよこれ
むゆきの知乃むすめみも
乃くまへくるる
いこ松をとわ山よ方をなて

露ながら折よりもとそ思ふ
かへし
かことわは落山とみるも君をいまきて
淀乃雨よりぬれてそ越く
おとこのいとゐまうけるよ
君かり方よりおくるよみてよこせ川
まつ秋まてなくなくへつらふ
いとのかりかねとともにそく
つきすとてうへはりける
秋ぬまてなくもともおく衣
りとふりそきこわを
返し
わきもちいんも起うかこうも

きてなく淀そきよもちく
誠よまうわく人よあまつ
もととて
そへてやるあき風心
ふおもふ人乃てをきよ
文例もむすめのもちのつまる
まくらよつくく
前原滋躬むすめ
君をみむとてのつまへりものを
ひつ乃山落そけきやそ
つくへまるそきよいこの君
物よをくそあひこそわくる
小野宮ぬし卿下
年をへてあひこそ人乃われ

羇旅歌

うちみとうらみとの浦を
ものもそよふうきぬる時生つつこの
うちみとの小もも乃こぬるぬちて
海乃かとわそこれをえう
一はてしなくつゝてよ

小町

花をきてうつらにぬるもかうこの
かきつはなをせる神ま波の
ゆめまもるとも人乃もとへまかりく
ゐよきつゝのゆめからの夏そて
ひて乃京よもまかりのほりくるまお

七、静法師

ゆめか浪夏乃山ちをりく人々

まつるもぬるもうとうとぬるぬ
法皇をはる山ちこ孫て京よ
へをゆよ狼乃やとわし孫て
法ともよきふぬ道係よう
をゆるよ

傍正室宛

人ふよふ
春ちくもなわよくるかる
ちたる係ゆをて、ゆかり係くよ
舟の中をゆて

男うへ

てる月ゆふるる乃れ天の川
いはるみをい海よそをくう
こう院立てる院
なの浦こそ乃ふむーろよへつ、

心ぞくもみなそこもみな
京より思ふ人を待つとて
きくよりそくもまわりて九月
うりは
よろづ人
おもふ人みてかへまいつこの
つまでつよひ清姫そうまき
筆松ゆふしぐれはなや
家もなこそ
やのきとこそ
まきわくるまお日をとおり
てそ
牡丹ふんをこやきの乃
瀧乃しら泡よけちやそうん

後撰和歌集巻第二十
賀
題知らず 衣傳
八乃千よろづ元宮乃みこのみや
賀ぞ 佐久良まさくら
もぜまそうおりて
前原伊衛門尉
等代乃宮
うつ波やも 松ぬ 菊を
曲待まさくもかもくもつ
乃ぞ 賀ぞ 佐久良
清師乃もかもぬ ひてつ
もくれ曲待まさけいこ
雪ぢくまぬ夜うもまて

もとよわもそ　　ゆいを法師
もくいへてつ　　つけける

百年よやそ　　僧都仁教
むのさる　　
九大尼の家　　
送るそしく　　

花乃盛かな　　
今上帝乃ふ　　
大尼乃ふし　　
うへをそ　　
うそまつ　　

尼うめいそ　　大政大尼　真信公
ひさかの乃　　
出返し　　

をしへ事た　　
花をとも　　
今上梅つ　　
まこうもそ　　
やへ八乃これ　　
お母く懐と　　
出返し　　
御製

年乃もつと　　
いとこつけ　　
東宮乃出　　

こひしきまゝに事のかきつゞけられ
ぬるをみこゝろにまかせてかきつけて
つけて切ぬるこゝろよ

太右兵

程もなき身をうちもいでぬ君もゝ
ゝとう形見のつゝみ

返し

切のこと

跡をきしうらなくも切ぬるよ
いく志のみこゝろのみの芋をつむふ
ゝのみこゝろのとゝひはそ

伊勢

きて安きくゝ事ともおもおも
人乃おこゝろもつきやきぬん

返し

淡ひなく寸
某くゝもゝ衣てふなるまゝ
いとゞ淡そふなるまゝ
先考おもひつゝまをりくれ
しの三回忌送り行くゝ

三条大兵

いつてよそふや苦あれおもふま
もりてめいむつなるよ
へし

百疱相兵

ふて淡ふ年のつゝもてい
ゝまもうくきわ
ゝてつゝをほ

三隊大兵

返し　大将